

千葉県最初の水道建設

1

♪大多喜城下にやお嫁(よめ)にゆくな
朝の暗いうちから水くみ仕事
水くみ水くみで日がくれる♪



歌にも歌われたように、140年ほど昔、大多喜城下の人達はたいへん水こまに困っていました。

そこで大多喜藩知事 大河内正質はんちじ おおこうちまさただは、城山から水を引くことを決意しました。城下の豪商 小高半左衛門おだかはんざえもん（柳原）が世話役となり、三上七五郎みかみ しちごろう（上原）高橋四郎左衛門たかはししろうざえもん（小苗）等が中心になり計画を立てました。

「きれいな水が飲める」

「川まで水くみに行かなくてもいい」

「さあ、協力して働こう」

人夫たちは朝早くから夜遅くまで、一生懸命働きました。この工事で延べ5,606人が働きました。

2

明治2年11月、静かな城山にカマ、ナタ、クワやスキ、モッコを持った大勢の人夫たちが集まりました。

「みなさんご苦労さまです。工事完成のあかつきには、私たちの生活がきっと豊かになります。・・・川まで行っていた水くみもなくなります。万が一火事がおこっても、水の心配はなく・・・」

半左衛門は工事によってもたらされる豊かな生活を説明しました。そうして最期に

「・・・みんなで力を合わせて働けば短期間で完成します。みなさんよろしくお願ひします」と、話をしめくくりました。

人々は半左衛門のことば一つ一つにうなずきました。

3

明治3年5月。工事開始からわずか7ヶ月という短い日数で工事は完成しました。この短期間の完成に、半左衛門、七五郎、四郎左衛門、そして大河内正質もおどろきました。

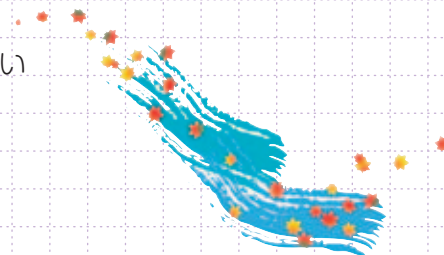
「やったー、水がきた」

「ばんざい、ばんざい」

手を合わせ、水に深々と頭を下げ、祈る人たちがいました。

この水道は昭和29年、町営水道ができるまで約80年もの間、大多喜町民に恵みを与えてきました。

おしまい



（齊藤弥四郎 ふるさと民話さんぽ 「広報おたきNo.434」より） 【大多喜町】